



ブラ・なよる

観光ガイドブック



名寄観光ガイドブック スラ・なよろ

…… もくじ ……



1. 自然編

名寄の地名	1
ピヤシリ山	2
九度山	3
名寄盆地の気候と地形	4
天塩川と名寄川	5
サンピラーと雲海	6
市の花：オオバナノエンレイソウ	7
市の木：シラカバ	8
市の鳥：アカゲラ	9
名寄鈴石	10
名寄高師(たかし)小僧	11
テツン地形	12
智恵文沼	13
ふうれん望湖台自然公園	14



2. 歴史編

松浦武四郎宿营地	15
佐藤正克越冬地	16
北風磯吉	17
天塩川 スーポロ	18
道路元標と市街地区画	19
浅江島公園と記念木	20
名寄駅舎	21
名寄のレンガ建物	22
名寄教会会堂	23
旧・西田直治郎邸	24
SL排雪列車キマロキ編成	25
名寄岩銅像	26



3. フィールド編

名寄公園とミズナラ林	27
なよろ健康の森	28
砺波ヶ丘自然公園	29
比翼・晨光の滝	30
九度山	31
ピヤシリ山	32



4. アクティビティ編

装 備：ティバック、共通の持ち物、 自然に親しむ持ち物	33
足元と服装：夏の服装、冬の服装	34
心構え：危機管理、フィールドマナー	35



5. 施設編

名寄市北国博物館	36
なよろ市立天文台 きたすばる	37
薬用植物資源研究センター北海道研究部 標本園・アイヌ有用植物園	38



「スラ・なよろ」コース案内	39
---------------	----



自然編：その1

名寄の地名

北海道の地名の8割ほどは、先住民であるアイヌの人たちが付けた地名が由来といわれています。「**名寄**」もアイヌ語の「**ナイ・オロ・プト**」(川の・ところの・口)が語源です。これが「ナヨロフト」と簡略され「ナヨロ」となりました。川は名寄川で、口とは天塩川との合流点を指します。

文字としては、今から200年ほど前の江戸時代の記録に「ナエロ」と残されています。明治30年10月には天塩国上川郡に、剣淵、士別、多寄、上名寄の4か所の村がおかれ「名寄」の表記が登場します。この前後には

「**なよろ**」とか「**なよろふと**」と記したのもありますが、いずれも漢字表記の由来は不明です。おそらく音を漢字に当てはめたものでしょう。

ちなみに、**ふうれん**「**フレ・ベツ**」(赤い・川)、**ちえぶん**「**チェプ・ウン・トー**」(魚が・入る・沼)です。

* 地名由来の地である合流点近くへは、無雪期であれば恵名大橋(けいめいおおはし)脇の堤防から車で行けます(駐車可)。水の神様である「明神子河童(みょうじんこがっぱ)」の銅像がある所から北に見ることが出来ます。北東に九度山が座し、眺望の良い場所です。





自然編:その2

ピヤシリ山

986.6m

名寄市・下川町・雄武町



名寄市街からは北東にある九度山から右に目を移すと、奥に見えるゆるやかな山がピヤシリ山です。名寄の学校の校歌にも多く登場する山ですが、実は大きなミステリーが二つあります。一つは地名の由来です。アイヌ語で「ピ・アツ・シリ」(岩・ある・山)に由来しますが、名寄側からは岩は見当たりません。名寄川を遡り下川町に入ると頂上近くに3つの大岩が見えることから、名寄川に住むアイヌによって名付けられたことが分かります。二つ目は、山頂が一つではなく二つあるツインピークであることです。国土地理院の地形図を見れば分かりますが、現在頂上とされているのは1等三角点(986.6m)のある西側のピーク(名寄ピーク)ですが、ここから750mほど東にもう一つの991mのピーク(下川ピーク)があり、実はこちらの方が5mほど高いのです。

ピヤシリ山は、道北地方を南北に連なる北見山地北部の一面を占め、周辺の山と同じ、約1300万年前の火山溶岩の噴出でできました。粘り気の弱い溶岩であったため、裾野の広がり割には傾斜のある山にはな

らず、緩やかな山頂の台地状の山容が特徴です。高緯度に位置するため山頂付近にはキバナシャクナゲ、イソツツジなどの高山植

物が見られます。樹木は頂上のハイマツをはじめダケカンバ、エゾマツなどで林床は背が没するほどのチシマザサに覆われます。

頂上からは利尻山、オホーツク海、大雪連峰が望めます。冬季は大陸から吹き付ける風雪と厳しい寒気による雪粒が木々に付き、モンスターとよばれる豪壮な樹氷を育てます。「日本百名山」の著者・深田久弥も昭和14年2月にスキーで登り、そのすばらしさを絶賛しています。昭和45年、名寄市が西の九度山の麓から山頂まで道路を造成し、平成2年には8合目から雄武町に通じる峰越林道が開通しました。山頂付近は自然休養林(保健保安林)となっています。

* 明治の地図測量時の「点の記」には、「飛嶽山(ひやじりさん)」と記され、測量官は地元のアイヌに案内されて沢筋を詰めて登頂しています。

所在地を確認できます



自然編:その3

くどさん 九度山

673.6m 名寄市字日進 <平成21年 国指定名勝>

九度山は名寄市街から望める673.6mの山で、名称はアイヌ語の「クトウンヌプリ」(岩崖のある山)に由来します。別名「チノシリ」(我々が祀るの山)とも呼ばれ、非対称の山稜と山頂に岩稜が連なる山容は、先住のアイヌにとって日々の祈りの対象であり、狩猟時の目印の山として大切な存在でした。

現在ではピヤシリスキー場のある山としてスキー、スノーボードや登山道を利用した自然探訪に四季を通じて多くの方に利用され、アイヌの時代から現在に至るまで地域のシンボリックな山です。これらから、文科

省が平成21年から始めたアイヌの物語、伝承、祈りの場などの景勝地を保護する「ピリカノカ」(美しい形)事業の名勝第1号として指定されました。

* 指定された山頂の岩稜部は、夏は登山道の中腹から、冬はスキー場第4口マンスリフトの終点付近から望めます。頂上は保護帯でもあり、崖が切れ落ちているため立ち入らないでください。

所在地を確認できます





自然編:その4

名寄盆地の 気候と地形



名寄は地形的には「**名寄盆地**」に位置しています。盆地とは山地に囲まれた内側の平地です。名寄では東に南北に連なる北見山地と西の天塩山地がそれにあたります。四方を囲まれず、東西の山に区画され天塩川が流れる南北に開けた構造盆地です。

名寄盆地は「多雪寒冷」という特異な気候をもたらしてくれます。それは北海道北部が東西に海があり、大陸からの季節風と気圧配置に影響を受けるためです。雪は日本海上を吹く湿った風が天塩山地を経て北見山地に当たって多雪となります。その後の寒冷は、東のオホーツク海を閉じる流氷により大陸的な気候となり寒冷となります。一方で夏は盆地的気候で気温が上昇します。公式記録ではありませんが、最低はマイナス38.5℃(昭和6年1月27日)、最高は39.8℃(昭和18年7月13日)で、この温度差77.8℃は日本一です。

地形は現在の姿はおおよそ10万年前からですが、その前には億単位の大地の営みがあります。大まかに言うと、東の北見山地は約1300万年前の火山噴火による溶岩が

固まった山々からなります。溶岩の粘り気が少なかったため高い山にはならず、函岳、沼岳、九度山、ピヤシリ山など裾野の広い1,000m前後の緩やかな山となりました。夕日が沈む西側の山は天塩山地の一部ですが、雨竜川に開析された東側は雨竜山脈とよばれ、600m前後の直線的な山稜となっています。この一帯は1億年前の海底が時間をかけてせり上がったもので、その証拠に智恵文の西の沢の奥からはアンモナイトが産出します。名寄に面する西側斜面は沢水による浸食でピラミッドを連ねたようなユニークな地形(三角末端面)となっています。

また、名寄盆地の西側に広がる智恵文・砺波ヶ丘の平坦な丘陵は、30万年ほど前に起きた大きな水流の力で砂利・砂が堆積したもので、それを天塩川の支流が浸食して沢となり、現在の姿となっています。

* 東の山々の溶岩が冷え固まったのは安山岩とよばれ、庭石や板状のものは鉄平石とよばれ、敷石とされます。丘陵の土砂は採掘され土木工事に利用されています。



自然編:その5

天塩川と名寄川

天塩川はその源を北見山地の天塩岳(1,558m)の西に発し、東に北見山地、西に天塩山地に挟まれ北に向かって流下し西に流路を変え日本海に注ぎます。長さ256km(道内2位、全国4位)、流域面積5,590km²と細長い水系を持つ1級河川です。日本では珍しい北に向かう流路で、2市8町1村では上流で稲作、中流で畑作、下流で酪農が中心の農村地帯です。

名寄市は天塩川の上流の始まりに位置し、主に水田が広がる名寄盆地が上流側に広がります。風連20線の堰堤より下流の157kmの流路にはダムなどの工作物がなく、「ダウン・ザ・テッシ・オ・ベツ」に代表される日本最長の100マイルカヌー下りが楽しめます。天塩川は流域の7割を占める森林と川の距離が近く、四季を通じて水辺・丘陵・山地近

接型の自然に親しめるフィールドが特色です。

名寄川は、名寄市街の北で天塩川に合流する大きな支流で、長さ50kmほどです。源流はウエンシリ岳(1,142m)の西側で、大部分が国有林から浸透された水は川床に鮭の産卵床を多く分布し、アイヌの生活にも恵みをもたらしてくれました。名寄から堤防沿いに徒歩・サイクリングロードが整備されつつあり、川を眺めながらのウォーキング、サイクリングが可能となります。

* 2019年に、名寄川に北から流入するサナル川にダムが設けられました。ダム湖上流のサクラマス産卵床のために長大な魚道が設けられ、今後その効果に注目が集まっています。

所在地を
確認できます





自然編:その6

サンピラー と雲海



なよろ
名寄では、寒さにまつわる特異な気象現象が二つ体験できます。

ひとつは、サンピラー(太陽柱)です。これは冬季に、快晴、無風、気温マイナス25℃前後などの条件がそろえば、朝日か夕日の時間帯に見られます。でき方は、空気中の水分が凍ってできる板状、柱状の氷の粒(細氷・ダイヤモンドダスト)の密度が濃いとこに、斜め方向からの当たった太陽光線が乱反射して柱状に輝く現象です。

昭和60年頃に、早朝のピヤシリスキー場のゲレンデに発生したものを複数の方が写真におさめ、北海道教育大学や北海道大学低温研究所の専門家に照会してサンピラーと判明しました。極地に近い地域ではよく見られますが、国内での確認と撮影は初めての事でした。その後、市民が「細氷現象フォト研究会」を発足させ、朝夕のサンピラーや夜のライトピラー、昼間の太陽を中心にかさ(ハコ)現象を写真、動画におさめるなどして、市民や全国のマスコミにも広く知られるようになりました。

ほうしゃぎり
もう一つの雲海は気象用語では「放射霧」

と呼ぶそうです。盆地で見られるもので、10月に入った晴れた明け方に、夜間の放射冷却により盆地内の気温が下がり、大気中の水蒸気が霧状になり雲のような霧となり漂い、地表が覆われて雲の様に見えるものです。

いずれも、大気中の水分が冷却により発生する北国盆地特有の気象現象で、サンピラーの神秘さ、雲海の雄大さから、早起きは大変ですが、自然のすばらしさを体感してください。

* この両方を見られる場所が、名寄側から雨籠山脈を西に通じる「名母(めいぼ)トンネル」の入り口付近です。サンピラーは冬の夕方、雲海は秋の早朝に見られます。近くの駐車場もあります。

名母トンネル
所在地



自然編:その7

名寄市の花: オオバナノエンレイソウ

エンレイソウの仲間はユリ科の多年草で根茎から生じ、葉は尖った菱型で先端に花弁と花をつけ、いずれも3対ずつです。日本では北海道と東北の一部に生育する北方系植物です。花が咲くまでに十数年かかり寿命は30年以上であることから、長生きしなければ花を見られない事から「延齢草」の漢字が充てられています。また、アイヌも食べたという甘い実の形から「山ソバ」とも称されます。

変異が多く、基本はエンレイソウ、オオバナノエンレイソウ、ミヤマエンレイソウの3種で、種間雑種の6種が加わり9種が知られて、名寄では6種が確認されています。やや湿った明るい森林の林床に生育しており、アリが種についた甘い物質を巣に運ぶ

ことで種子が広がるため、群落をつくるには多くの時間がかかるといわれています。

市の花のオオバナノエンレイソウは、花が白く大きく、市民が春を待ちわびた5月中旬ごろに清楚な花を咲かせることから、春植物の代表格として指定されました。

* 名寄では時期になるとカラマツ林などの林床に見られます。群落のある所は大切にしてください。





自然編:その8

名寄市の木： シラカバ



シラカバは本州では高原や山地にしかありませんが、北海道では平地にも生育する広葉樹です。高木になり高さ30m、直径1mになります。道内の広葉樹では最も種類が多く、白い樹皮から「森のレディ」「森の貴公子」とよばれます。寿命はダケカンバ、ウダイカンバは200~300年ですが、シラカバは意外と短い80年前後とされています。

アイヌは種類により多彩に利用し、薄い樹皮は包み材、包帯の代用、厚いものは簡易の鍋や食器などの器に、また仮小屋の屋根

材にも利用しました。日本でも焚き付けや松明に使われ、材はバルブチップ、家具・床材の他、近年では楽器材やバットへの用途拡大も図られています。

市の木でもあるシラカバは、陽当たりを好む陽樹

で、山火事などの後に真っ先に生育するためバイオニアツリーの別名もあります。そのため純林をつくることも多く、名寄の風連地区ではよく見かけます。5月に葉より早く開花し、花粉症の人には困りものですが、早春の木から樹液を採取して飲料などに利用する方も増えています。

* 樹皮を生かした工芸作品の同好会が各地にあります。名寄では昭和30年から40年代にかけて、「銀樹舎(ぎんじゅしゃ)」が白樺皮やコケなどの天然素材で樹皮絵を販売していました。



自然編:その9

名寄市の鳥：アカゲラ

アカゲラはキツツキ科^{りゅうちょう}の留鳥で、およそ10種の道内生息のキツツキの仲間のうち、各地で見られ数も多いとされます。体長25cmほどで、体色の赤、黒、白の染め分けが美しく、オスは頭部の赤が多いことでメスと見分けがつけます。地鳴きは「キョツ、キョツ」で、波状に飛行します。餌探しとテリトリー宣言の意味もあるドラミングをすることから「森のドラマー」の愛称も付けられています。木の幹に入口の径5cm、内部の深さ30~45cmの穴をうがって子育てします。5月下

旬に産卵し卵は約3週間で孵化します。

尖ったクチバシと力強い首の動きで巣穴を掘り、ノミの様に木片を散らせる様子は見えても飽きさせません。冬にも活動的で、市民の目を楽しませてくれることから市の鳥に選定されました。

* 家庭では庭木の高いところに脂身を細かい網目容器に入れておくと頻繁に訪れてくれます。ピーナッツなどのナッツ類も好物です。





自然編:その10

名寄鈴石

名寄市字緑丘109番地
昭和17年
国指定天然記念物



「鈴石」は褐鉄鉱という鉱物の一種です。鉄サビのような色で、ほぼ球形でピンポン玉から拳ほどの大きさです。約10万年前にできた丘陵や台地の土中に産出します。その成り立ちはよく分かっていない部分もあります。(大まかには)土の中で鉄分と珪質分を多く含んだ浸透水が粘土や砂の周りを包み込み、アンが入ったマンジュウの様な球形となったと考えられています。外の皮は固くなり内側の粘土や砂が崩れて、振ると「カラカラ、シャンシャン」と音がするので「鈴石」と命名されました。

全国的には、岩壺(岐阜県)、鳴石(奈良県)とも呼ばれています。漢方薬では石葉として不老長寿の薬とされ、正倉院にも納められています。昭和5年頃、弁護士で郷土史家でもあった田中長三郎が発見しました。

* 包蔵地は緑丘の国道239号から脇道に入った地点で、0.38haが市有地として保護されています。土中にあるため現地では実見できません。実物は名寄市北国博物館で展示されています。

包蔵地を
確認できます



自然編:その11

たかし 名寄高師小僧

名寄市字瑞穂 瑞穂川 昭和17年 国指定天然記念物

「高師小僧」は褐鉄鉱の仲間しょうてつこうの沼鉄鉱しやうてつこうの一種です。鉄サビ色の筒状で、通常は直径が1~5cm、長さは10cmほどですが、名寄産はその倍近いものが産出しています。現在の地面を川が流れるようになった数万年前以降の川床や沼の縁の粘土中に産出します。でき方は、粘土中に生えたイネ科の植物の根や茎の周りに土中に溶けた鉄分が粘土や小砂利とともに付着し、棒状に大きくなったものです。芯となった植物の根茎は腐植してなくなり、細い穴が貫通しているのが特徴です。

漢方では土陰けつ、アイヌにはトイチイとかカニトイとかよばれ、利尿薬として用いられた石葉でもあります。幕末の探検家・松浦

武四郎も天塩川踏査たけしろう てしおがわとうさの折、幌延付近でこれほろのべを発見しています。愛知県豊橋市高師原たかしばらから多く産出したのが名の由来です。昭和の初めに、当時の農会技手の今野萬佐寿こんの まさとしと地元あしかわじろうの在川次郎により発見されました。

* 包蔵地は道道名寄遠別線から瑞穂川(みずほがわ)の脇道に入った地点で、河床(国有地)の土中にあるため現地では実見できません。実物は名寄市北国博物館で展示されています。

北国博物館
所在地





自然編:その12

テッシ地形

名寄市風連町字瑞生25線西4号 天塩川河床

なよろ てしおがわ
 名寄を流下する天塩川の川名の由来は
 アイヌ語の「テッシ・オ・ペツ」(築のある川)で
 す。築とは川を柵状の構造物で仕切り、開口
 やな
 部を1か所開けてそこで魚を捕獲するもの
 です。天塩川は中流から上流にかけて、河床
 からせり出した筋状の岩盤がまるで築のよ
 うに川面を横切る地形が多くみられる事か
 ら川名の由来となりました。本来の由来の場
 まつらたけしろう てしおにつ
 所は、幕末の探検家・松浦武四郎の「天塩日
 し
 誌」に記された美深町紋穂内のテッシ(現・美

深アイランド内の川跡)ですが、オートキャンプ
 場造成時に埋め立てられています。

ふうれん ずいしょうばし
 名寄では風連の瑞生橋の下流にあり、夏
 の減水の時には川面の中ほどまで帯状の岩
 盤が現れます。

* 瑞生橋の堤防から高水敷にある「さざなみパーク
 ゴルフ場」に下り、その北端の岸から間近に見ること
 ができます。必ず複数で行き、水量に注意しながら
 見てください。



自然編:その13

智恵文沼

名寄市字智恵文



ち えぶんぬま
 智恵文沼は名寄市街から北東12kmに位
 置し、かつて天塩川が北側に大きく蛇行して
 てしおがわ
 いた部分を、昭和21年に流路を直線化した
 際にできた三日月湖(河跡湖)です。南に開い
 たU字型で、長さ3km、幅20mを測り、周囲
 は畑地です。

昭和30年代よりヒブナ(緋鱒)が釣れると
 評判となり、旭川などから釣り人が訪れるよ
 うになりました。ヒブナは釧路くしろの春採湖で
 はとりに
 国指定の天然記念物にも指定されている、
 ギンブナの体色が突然変異したものです。
 その後、外来種のライギョが繁殖し始め、湖
 面にはヒシ(菱)が覆い、在来の魚類の生息
 環境は変化しつつありますが、ヘラブナと少
 なくなったヒブナを目当ての釣りは絶えま
 せん。

びふか
 沼の北側の道々智恵文・美深線の脇に駐
 車場、トイレなどは整備されていましたが、
 平成10年頃より「ひぶなの里・智恵文沼
 パーク」として整備されはじめ、東側の湖面
 の一部を埋め立て、休憩小屋、トイレが設け
 られ、内側の岸をめぐる遊歩道も設けられま
 した。これと前後してヒシと湖底のヘドロ除

しゅんせつこうじ
 去を兼ねた浚渫工事も
 実施されています。

地元には沼を守る活
 動もあり、全体として自
 然河川流路の景観が
 保たれております。平

成5年には鳥獣保護区に指定され、静水水
 辺のため草原の鳥、渡り時期には10種以上
 の水鳥が飛来し、冬季はオジロワシの越冬
 地として探鳥にも最適です。野鳥はマガモ、
 オナガガモ、ヒドリガモ、コガモなど30種以
 上、植物は、ヨシ、ヌマガヤ、ウキクサ、コウ
 ホネ、ヒシなど水辺の植物はじめ238種が
 確認されています。

* 沼に接する内側と東西は農耕地ですので立ち入ら
 ないようにしてください。

* 天塩川下流の中川町、幌延町の三日月湖にもヒブ
 ナが生息しています。

所在地を
確認できます





自然編:その14

ふうれん 望湖台自然公園

名寄市風連町字池の上



ぼうこだい ふうれんちよう
望湖台は、風連町市街から東10kmにある
ちゆうれつぷ
忠烈布湖(灌漑用貯水池)を取り巻く131haを
有する自然公園です。湖の南側は道有林、
東と北側は町有林で、保安林と鳥獣保護区
しんこうこんこうりん
に指定された針広混交林が広がります。昭和
56年から道営事業として散策路、樹木、
花木の植栽、下刈りなどの整備がなされ、並
行して風連町によるセンターハウス(温浴施
設、食堂)、フィールドアスレチック、駐車場な
ども整い、平成に入りオートキャンプ場が加
わりました。かつては通年利用がなされまし
たが、老朽化などで一部の施設の休止、散
策道が廃止となり現在は湖畔北側のオート
キャンプ場を中心として春から秋にかけ利用
されています。

自然散策を目的とする場合は、大きく3つ
のゾーンに分かれます。

①湖東側の湿地には、ミズバショウ、エゾ
ノリュウキンカ、バイケイソウのほか観賞用
のスズラン、ジャーマンアイリス、ショウブが
季節に合わせて花を咲かせます。

②湖畔水面側には、ヨシ、スゲなどの湿地
性植物と、湖畔林としてヤナギ、ハルニレ、

ヤチダモ、ハンノキが
見られます。アカエリ
カイツブリ、オシドリな
どのカモ類も観察でき
ます。

③湖畔北側の2本の
小沢をめぐる1.8kmの散策道は森林浴に最
適です。山奥側にはアカエゾマツ、トドマツ、
シナノキ、エゾイタヤなどの針広混交林があ
り、尾根上にはアカエゾマツ、トドマツの針
葉樹とシラカバの純林、カラマツの植林地
もあり多彩です。野の花は春の花を中心に、
イチゲ類、エンレイソウ類、シダ類の他、ナニ
ワズ、ツルシキミ、エゾユズリハなどの低木
もあります。花木ではサクラ、シャクナゲ、ツ
ツジも植えられています。

野鳥は水辺、山林、草地と多様な環境に
恵まれ、カモ類の他、ノスリ、ハイタカなどの
猛禽類、カラ類、キツツキ類、草原の鳥など
70種が確認されています。

* オートキャンプ場の利用、施設概要については、市
販のキャンプ場案内を参照ください。

所在地を
確認できます



歴史編:その1

松浦武四郎 宿营地

名寄市字日進

まつうらたけしろう
松浦武四郎は三重県松阪市出身の探検
家です。幕末の蝦夷地と樺太、千島を6回
えぞち からふと ちしま
にわたりくまなく踏査し、その記録を正確な
紀行文や地図などとして残す大業績を成し
遂げました。また、当時の明治政府の依頼
を受け、「北海道」の道名案を提案してい
ます。

てしおがわ あんせい
天塩川流域にも安政4年(1857)に地元
のアイヌを道案内に、天塩川河口から丸木
舟でさかのぼり、名寄川と天塩川上流まで
踏査し、当時の自然やアイヌの習俗や暮ら
しぶりの実情を調べています。この記録は
てしおにし ぶんきゆう
「天塩日誌」として文久2年(1862)に江戸
で木版本として発刊されています。この本
は紀行文として幾分脚色と簡略された内容

ですが、近年その
原本となった詳細
記録が「天之穂日
誌」として活字化
されています。

詳細記録では、
武四郎は陰暦6月
15日(今の7月下旬)
に天塩川と名寄川
の合流点から名
寄川に少し入った
川岸に上陸し、ア

ヘルイカというアイヌ
の家に宿泊しました。
現在の日進地区の河
岸段丘上と考えられま
す。ここを拠点に名寄
川を2泊の行程で踏査
し、アイヌの風俗や用具、貧しい暮らしぶり
を記しながら、帰途を含めて市内で4泊して
います。

* 正確な宿営地は不明ですので、説明板はピヤシリ
大橋南側の堤防上に設置されています。

所在地を
確認できます





歴史編:その2

佐藤正克 越冬地

名寄市中名寄7線 名寄川右岸

明治5年(1872)、当時の開拓使の役人であった佐藤正克は、まだ開拓入植計画も定まっていない天塩川流域の実情を探るための調査を計画しました。23歳の若さながら、事前に名寄川の川岸に小屋を作らせ越冬して、天塩川・剣淵川の上流まで踏査しようとするものです。記録に残る限りでは、和人として初の越冬です。

彼がその時の記録をつづった「關幽日記」によると、明治5年10月19日から翌年1月4日(陰暦)まで、名寄川に注ぐ支流の拓進川河口の小屋を拠点に滞在しています。越冬

生活は越冬食糧用に事前に送ったイモなどが保存の悪さから食べられず、困難の連続でした。この時、身の回りの世話をしてくれたのは、15年前に松浦武四郎の踏査に同行したトキコサンという地元のアイヌで、一緒に魚を獲るなど助けられながらの日々でし



た。最大の目的であった剣淵川上流から石狩川上流を超える道筋は、道案内のアイヌの記憶が薄れていたのと吹雪にも阻まれ達することはできませんでした。目的は達成できなかったものの、アイヌと生活を共にした記録は貴重なものになっています。

* 名寄川は鮭の産卵場が多くあり、昔からアイヌが生活していたことが知られます。

所在地を
確認できます



歴史編:その3

北風磯吉

名寄市字内淵

北風磯吉は、人生の大半を名寄で生きたアイヌです。明治13年、現在の下川町上名寄15線の名寄川右岸で生まれました。幼い頃から和人行商人に読み書きを教わったといわれ、16歳で入植前の天塩川内陸部の測量隊に加わりました。明治31年に当時の上名寄村(旧名寄市と下川町)の内淵地区に区画されたアイヌ給与地に一家は移住し、結婚して農業に従事しました。

明治37年、旭川第7師団で応召した日露戦争では旅順、奉天の激戦に伝令として活躍し、同39年には軍功が認められて金鵄勲章を受け、アイヌの勇者として新聞や少年雑誌にも取り上げられました。その後も内淵で農業を続け、地区の学校建設に敷地と費用を寄付し、またアイヌ給与地を守る運動などで人々の信頼を集めました。この間、昭和20年代まで孵化場や炭焼きの仕事もしています。

昭和25年頃から、天塩川流域のアイヌ文化を知る数少ない伝承者として認められ、同29年の旭川静和園に移った後の同40年頃まで、多くのアイヌ研究者にアイヌ語方言、テシオアイヌの伝承、風習などの聞き取りに応じました。その成果は多くの研究書などに収録されましたが、昭和45年に90歳で死去しました。

その生涯において、農民、兵士、アイヌ文化伝承者として、自らの価値観と誠実に向き合い、「アイヌ・ネアン・アイヌ」(より人間的である人間)として生き抜いた人物です。

* 北風の遺品は、関係者の努力で名寄市に寄付され、名寄市北国博物館に常設展示と収蔵されています。

北国博物館
所在地





歴史編:その4

天塩川 スーポロ^{かわふねそうなん} ~川船遭難の地

名寄市字智恵文智東の天塩川

なよろし ちえぶんちとう てしおがわ
名寄市智恵文智東の天塩川は、東側の
くどさんすその きゅうりょう
九度山裾野と西側の智恵文丘陵に挟まれた
狭谷部を流れています。川幅が狭く早瀬と
なっており、アイヌ語で「スーポロ」(激流の
所)「カムイコタン」(神の住む里)とよばれ、丸
木舟の操作に慣れたアイヌにも恐れられた
天塩川随一の難所でした。

和人による開拓後も、明治45年に宗谷線
おといわつふ
が音威子府に達するまで、たびたび川舟の
遭難があり、「智東の滝」「天塩川の滝」とも
呼ばれていました。そのため、明治43年7月
10日にこの地の通行の安全を祈願するた
め関係者により建立されたのが「金毘羅大
こんげん
権現」の石碑でした。ところが、翌年の明治
44年5月には、35石(5.25トン)積みの運漕
せん
船が鉄道建設資

材の積み過ぎもあり、雪解け水で増
水した川で転覆し
15名もの遭難者
をだしました。当
時の新聞にも大き
く報道された大事
故でしたが、碑そ
のものは人の近づ
けない左岸の斜
面に建てられてい



たため、いつしか倒れ
て姿を消し、事故の記
憶と共に忘れられる事
となりました。70年後、
昭和50年の河川改修
工事の測量の際、水辺
に倒れている碑が偶然発見され、同60年に
右岸側に再建されました。今でもカヌー下り
には難所ですが、往時の姿はありません。

* 碑は市道脇の台状の土盛りの上にあります。付近の
川岸は8000年前の縄文時代から1000年前の擦
文時代までの智東遺跡が残されている場所でもあ
ります。

所在地を
確認できます



歴史編:その5

どうろ けんびょう 道路元標と市街地区画

名寄市西4条南4丁目(トトリ前)

どうろげんびょう
道路元標とは、道路の起点、終点などを
表示する標識です。名寄では幹線道路の
なよろ
国道40号(西4条南4丁目)にあります。一辺
20cm、高さ70cmほどの砂岩製の四角柱
で、「道路元標」「昭和3年 北海道廳」と刻
まれています。

名寄に通じる道路のはじまりは、明治32
年11月から進められた土別~名寄間の仮定
県道の整備からです。当時の道路は原野の
草木などを9尺(約2.7m)幅で伐採し、中に6
尺(約1.8m)の道幅を道路とするものでした。
小川や沢には土橋をかけ、湿地は水抜きす
る程度で砂利などは敷かず、人馬がようやく
往来できる程度のもので、雨が降
ればぬかるみとなり重たい荷物の
運搬には不向きでした。

道路元標のある場所は、明治
35年に区画測量された名寄市
街地の西端にあたる南北の西4
条通り(国道40号)で、道路を挟ん
で西側は開拓者が入る殖民地(農
地)区画でしたので、住宅地の市
街地区画とは区画の幅が違うた
め、市街地から東西に通じる道路
(丁目)は、西4条を越えて直線で
貫くことができませんでした。現
在も中央通りと南6丁目通りだけ

は直線で通じています
が、それ以外の東西通
りはいずれも西4条通
りを境にずれているの
はこのせいです。西4
条通りは、名寄で最初
こちょうやくば
に戸長役場や商店が立ち並んだ通りです。
その脇にあった道路元標は、通りの賑わいを
見続けてきた生き証人ともいえます。

* 名寄の町並みは、明治36年に名寄まで鉄道が通
じ、市街地区画の南東に駅が設けられたことによ
り、西5丁目・6丁目、大通りと広がっていきました。

所在地を
確認できます





歴史編:その6

浅江島公園と記念木

名寄市西13条南2丁目付近
〈北海道開拓百年記念木(昭和30年) 北海道記念保護樹木(昭和49年)〉

あさえじまこうえん なよろ てしおがわ
浅江島公園は、名寄市街地の西で天塩川
がかつて大きく蛇行していた一帯にあった
農場の一面を都市公園としたものです。農場
主は名寄郵便局の初代局長も務めた大河原
あさえ おおかわら
浅衛で、公園名は彼の名と天塩川の蛇行に
よってきた中島に由来します。天塩川は名寄
に鉄道が達するまで川舟運送に使われ、市
街地近くまで蛇行した川岸には船着き場も
設けられました。

大河原農場ではその一角を私設公園とし
て開放し、三日月池に丸木舟を浮かべたり
東屋を設けたりしました。大正から昭和にか
けて野外宴会や散策に利用されました。戦
後は築堤工事後の昭和40年代からの区画
整理事業で大部
分は住宅、官舎や
学校となりました
が、市民文化セン
ター北側の6.8ha
を都市公園として
整備し、その中
にある自然木の柳
はかつての河岸
の面影を残してい
ます。

公園西側の天
塩川堤防脇に樹



齢500年を超えるハル
ニレの巨木があります。
この木は農場開設以
来、神木として祀られ
ていたもので、堤防工
事の際も地区のシンボ
ルとして住民の要請を受け、伐採を免れ保
存されたものです。

* ハルニレはニレ科の肥沃な土地に生える落葉樹
で、アカダモ、エルムともよばれます。街路樹や家
具・楽器材としても利用されます。

所在地を
確認できます



歴史編:その7

名寄駅舎

名寄市大通南6丁目

なよろえき
名寄駅は、明治36年(1903)9月3日に、
今は宗谷線ですが当時は天塩線が名寄まで
開設された際に設けられました。駅舎は切妻屋
根に下屋を廻らせた写真が残っています。
現在の駅舎は昭和2年に新たに改築された
2代目の建物です。その後、4回の増・改築を
経て現在に至っています。大きな特色は北
海道初となる建物の構造材の鉄骨に古レー
ルが転用された「軌条駅舎」であることで
す。ホーム周りを含めて1896年から1925
年までのイギリスとアメリカ製の輸入レー
ルと国産の八幡製鉄所製の3種のレー
ルが使われています。

昭和24年、北の十字路の「鉄道の街」と
して多くの鉄道施設が配置され、駅舎も北
側に増築され、倍の広さになります。正面の
子屋根が2か所増え本屋根には丸時計が付

けられました。昭和63
年に国鉄がJRとなる
際に再改修がなされ、
前回の増築部が減築さ
れました。平成11年に
は屋根と壁の色を変え
る化粧直しがなされました。そして、平成も
終わる平成30年には昭和2年の建設時のイ
メージを再現する塗装と補修工事がなされ
ました。

名寄の顔でもあった駅舎とその南に連な
る鉄道施設はほとんどがなくなり、駅舎だけ
が先祖がえりをして、新しい街の顔となりま
した。

* 駅舎の屋根の色は、赤→青→緑→赤と移り変わっ
ています。

所在地を
確認できます





歴史編:その8

名寄のレンガ建物

名寄市街地

レンガはセメントによるコンクリート構造物が普及するまで、鉄道橋脚、工場、倉庫、蔵、煙突などの構造材として利用されました。北海道のレンガ製造は明治期の開拓進展に伴って需要が急増し、各地にレンガ工場が出来ました。名寄ではレンガ用、陶土管用の良質の粘土が緑丘に産出することから、明治43年に「館脇レンガ工場」、翌44年に「久保組レンガ工場」が相次いで操業を始めました。

当時のレンガ作りは「手抜きレンガ」とよばれ、練った原土を「抜き枠」という木枠に人力で打ち込み、はみ出した部分を切り取り、自然乾燥後に登り窯で焼き固めたもの

です。一連の作業は「抜き屋」と称する型抜き職人の腕が出来栄えと生産量を左右したといわれています。名寄のレンガ工場はどれも江別の系列で、20人以上の職人を雇



い昭和10年代まで操業されていました。

名寄のレンガで建てられた建物は、現存するもので旧名取酒造精米所(現・鳥見 西4南6)、小林質店の蔵(西1南6)などがあります。

* 2か所のレンガ工場のあった場所は、名寄産業高校名農キャンパスの北側と東側の一角にあり、登り窯の跡も残っています。

* 大通り南4丁目にある農協の倉庫は、本庫といわれました。大正6年建設され、当時では最大規模の農業倉庫で基礎部分が残されています。

所在地を確認できます



歴史編:その9

名寄教会会堂

名寄市大通南2丁目 <平成17年 名寄市指定文化財>

日本基督教団(プロテスタント)名寄教会の会堂は、明治42年に建てられた現存する市内最古の建築物です。正面の直線的な破風と上部が尖った縦長窓が特色です。

110年前にこの教会を建てたのは、この場所一帯にあった小北木工場(後に北一名寄木工場)を明治40年に設立した、小北一族です。共同経営者の西田直治郎と共に信仰の絆で製材業に成功し、記録によると建築費2,700円のうち6割を小北と西田が寄付しています。建材は当時の豊富な木材が使われ、外壁にはエゾマツ材、内部の礼拝堂の長椅子はセンノキを丸ごと用いています。

初代牧師は小北家の長男の寅之助がなり、教会の基礎を築きました。常に新しい西洋文化の受け入れ窓口だった教会は大正12年に名寄で初めての幼稚園開設のため、建物下にコンクリート基礎をもつ

半地下室を増設し、ほぼ現在の姿になりました。濃い緑色の外観は当初より変わっておらず、定期的に建物保全がなされた結果、今日にその姿を留めています。令和元年にも全面的保全工事がなされました。

* 建物は通りから眺めることができます。敷地内への立ち入りは、幼稚園の保育活動の場所でもありますので、ご注意ください。

所在地を確認できます





歴史編:その10

旧・西田直治郎邸(雪あかり館)

名寄市大通北1丁目

木立の中にたたずむ旧・西田邸は、明治42年設立の「北一名寄木工場」の共同経営者の小北一族より西田新蔵の養子となった直治郎が、大正11年に建てた住宅です。床面積が519㎡(約147坪)、和室7、洋室7の部屋数をもつ大きな家です。間取りは中央の十字型の廊下が各部屋をつなぎ、建物を大きく西側の接客部分と東側の家族生活部分に分けています。外観はイギリス積みレンガ基礎、ドイツ下見張りの壁と片流れの屋根、2階の屋根から突き出たトップライト風窓などは洋風の特色をそなえています。特に大通りに面した西側の人目に触れる部分には出窓・上げ下げ窓を配し、洋風建築を

印象付ける工夫が見られます。一方、東側の家族が生活する部分は和室と縁側、漆喰壁など和風建築です。

建築当時、内部の柱などに節を見つけたら賞金が出るといわれたほど、当時の木材景気の中で豊富な良材を用いて建て

られた家です。西田家は何年も住まずに東京に転出し、その後、個人宅、寮、市職員会館として利用されました。

平成19年に老朽化により意匠保存のもと一部減築して改築され、名寄市北国雪国ふるさと交流会館「雪あかり館」として生まれ変わり、広く市民に利用されています。

* 管理人が駐在時は申し出て内部の見学が可能です。

所在地を確認できます



歴史編:その11

SL 排雪列車 キマロキ編成

名寄市字緑丘 名寄公園内 旧名寄本線線路上
<平成22年 JR北海道準鉄道記念物指定>

「キマロキ」編成とは、機関車・マックレー車・ロータリー車・機関車の順に連結され、各車の頭文字をとって名付けられました。雪の降る北海道や東北・北陸地方では通常は先端が三角形のラッセル式羽根で雪を線路の両脇に跳ね飛ばして除雪します。しかし降雪が多くなると線路脇に高い雪の壁ができ、ラッセルでは困難となります。こうした時に「キマロキ」編成の排雪列車が出動となり、機関区と保線区から十数人が分乗し協力して作業にあたりました。先頭の機関車が雪の壁を切り崩して掻き集めるマックレー車を引き、寄せた雪をロータリー車が回転する羽根で遠くに吹き飛ばし、そのロータリー車を機関車が後押しするという一連の作業で除排雪を行いました。キマロキが活躍した昭和40年代までは、鉄道が貨客輸送の主役で、沿線住民の冬の生活を守る欠かせない存在でした。

昭和50年、SLが全国的に廃止され、翌51年、当時の国鉄から名寄市が無償貸与を受

け、名寄公園北側入口に展示されたのち、平成7年から現在地に移設されました。国鉄OBや市民による名寄SL排雪列車(キマロキ)保存会により整備・保存され当時の雄姿をそのまま残しており、全国から鉄道ファンが訪れます。

* 車体の保全のため、10月下旬から4月下旬まではシートが架けられます。

所在地を確認できます





歴史編:その12

名寄岩銅像

名寄市西7条南12丁目 名寄市スポーツセンター前庭

「^{なよろいわ}名寄岩^{いわかべしずお}」(本名:岩壁静夫)は、大関まで昇進し名寄の地名を全国に広めた力士です。西4条北3丁目にあった生家は養豚業を営み、6人兄弟の長男だった静夫少年は大柄な体格を生かし家業の手伝いをして生計を助けていたといえます。16歳まで名寄で過ごし、東京で^{しんきゅう}鍼灸師になるための学校に通っていたところを、立浪部屋にスカウトされました。

昭和7年に初土俵、同12年に入幕、以来大関6場所、関脇15場所を務めました。昭和29年幕内在位44場所、40歳で引退するまでの間、「怒り金時」の異名で活躍し、当時、^{たつなみさんば}名横綱の双葉山、羽黒山と並び「立浪三羽^{がらす}鳥」とも称えられました。

一方でケガや病気も多く、一度は糖尿病により平幕まで陥落しましたが、実直な精神で二度関脇に返り咲いています。その姿は当時の「新国劇」で上演され、引退後の本人も出演し「涙の敢闘賞」という映画にもなりました。親方の付けたしこ名を断り、郷里の名寄を押し通し、当時途絶えていた賞金受け取り時の手刀を復活させるなど、数々のエピソードと律儀で礼儀正しい名寄岩の相撲道は、「力士の鑑」として日本相撲協会から特別表彰を受けました。引退後も年寄^{かすが}「春日山」を襲名し、後進の指導にあたりました。

* 名寄岩顕彰像(銅像)は、没後10年目の昭和56年5月に市民の浄財で建立されました。ゆかりの品は、名寄市北国博物館に展示されています。



北国博物館
所在地



フィールド編:
その1

名寄公園とミズナラ林

名寄市字緑丘3番地他
〈平成17年 名寄市指定文化財 平成26年 北の造園遺産〉

名寄市街地の南東^{みどりがおか}・緑丘地区の一画を占める名寄公園は、北を名寄神社、東を名寄産業高校名農キャンパスに接した緑豊かなゾーンです。開拓当時は現在の倍の広さを公園予定地として区画されていました。大正11年に内務省より払い下げを受け、後に南東側が当時の名寄農業高校用地として転用されました。当初から自然林などを生かした公園整備がなされ、昭和30年と平成8年には大規模な整備がなされました。平成4年頃には廃線となった名寄本線の線路、鉄道林が編入されて広さ20.86haの現在の広さとなりました。

現在、公園内にはひょうたん池、駐車場、テニスコート、市営球場とサブグラウンド、北国博物館、キマロキ展示場、パークゴルフ場などがあり、遊歩道で結ばれています。池の周辺を中心に開設当時のミズナラ、シラカバ、マツ類の大木を残して公園が整備された背景から、北の造園遺産に指定されました。特に、ミズナラは名農キャンパスの敷地も含めて、直径50cmを超える樹齢150年以上の大木が園内で276本、全部で500本ほどが純林的に残されています。市街地近接地に面的に残されているのは貴重なことから、名寄市の文化財にも

指定されています。

四季を通じて自然に触れ合えるのが特色で、冬季は歩くスキーやかんじきで巡ると、キツツキ・カラ類の野鳥が見られます。3月になると、北の名寄神社東側のマツ類にアオサギが50個ほど営巣しコロニーをつくります。夏にはトンボ・チョウ類、秋は木々の落ち葉やドングリ、松ぼっくりでネイチャーゲームも楽しめます。植物は木本で32種、草本で229種が確認され、野鳥は4月から6月が探鳥に適し、カラ、キツツキ類、ハイタカ、チゴハヤブサなどの猛禽類も見られます。

* 春は植栽されたエゾヤマザクラの花見で賑わい、夏は売店もありスワンボート、遊具でも遊べます。

所在地を
確認できます





フィールド編：
その2

なよろ健康の森

名寄市字日進

なよろ健康の森は平成10年5月に名寄市にっしん地区の民有地を、健康、自然をテーマに造成した施設です。201haの森の中には、西側に陸上競技場、多目的コート、遊具、パークゴルフ場などのスポーツに親しむ施設と、東側にはもりの学び舎（展示学習室）、キャンプ場、林業体験林、葉草園などの自然に親しむ場があります。ここでは森の自然利用について記します。

敷地の東側の3分の2は緩やかな丘陵地を小沢が開析する地形で、一部にはカラマツ、トドマツが植林された二次林です。車が通れる林道と、それをつなぐウッドチップを敷き詰めた遊歩道が整備され、ウォーキング、ランニングにも最適です。東の山林に接しているため、野鳥、野の花、樹木はいずれも多種類を目にする事ができるのがこの森の大きな特色です。

春から秋の代表的な自然散策コースは、「ヘルシー小径」とよばれる沢沿いに進み、北側の尾根に上がって先端の標高180mほどの風車のある



所から名寄市内を一望し、下のキャンプ場に戻る2時間弱のコースです。遊歩道の脇の木々には、この地を知り尽くしたボランティアの方が取り付けました表示・説明板が知識を深めてくれます。

冬季には、森の中を最長10kmのクロスカントリーコースが整備され、競技者の練習場となっていますが、一般の方も歩くスキーで起伏に富んだコースで野鳥の声や雪の造形を眺めながら巡ることができます。

* 「トムテ森の学び舎」は北海道が設置した林内の自然学習展示施設で、5月から11月いっぱい開館しています。中には、森の時期ごとの園内の自然を細かくガイドしたパンフが常備されています。

所在地を
確認できます



フィールド編：
その3

砺波ヶ丘自然公園

名寄市字砺波 夕陽が丘

となみがおかしぜんこうえんは、なよろ砺波ヶ丘自然公園は、名寄市街の西方約1.5kmにある広葉樹とカラマツが広がる自然豊かな所です。標高150m前後の丘陵の一画、2.5haほどを自然公園として昭和50年代に整備されました。北に一等三角点のある名寄山(160.6m)、南に砺波ヶ丘霊園があります。

四季を通じて楽しめますが、お勧めは5月です。雪解けを待ちわびたスプリング・エフェメラル(春のはかないもの)の野の花の群落が見られます。カタクリ、フクジュソウ、エゾエンゴサク、エゾイチゲの後にはエンレイソウ、オオバナノエンレイソウ、ミヤマエンレイソウなどが咲き誇ります。沢ではエゾノ

リュウキンカ、ミズバショウ、ザゼンソウも見られます。また、ヤマザクラも所々にあります。ほかにも山林の野鳥と色鮮やかなオオルリ、キビタキにも出会えるかもしれません。

散策コースは、霊園の駐車場から鉄塔に通じる林道

を行き、途中で脇道の遊歩道に入ります。名寄市街を西から一望できる休憩所でひと休み後、分岐を下り沢に下りて反時計周りに回り休憩所に戻ります。遊歩道両側に花が見られ、木々からの野鳥の声に癒されます。ゆっくり歩いて2時間以内です。

* 公園内には駐車場、トイレはありませんので、霊園のものを利用してください。

所在地を
確認できます





フィールド編：
その4

比翼・晨光の滝

名寄市字智恵文智東 吉野川沿い

「^{ひよく}比翼の滝」・「^{しんこう}晨光の滝」は名寄市街地より約10km、^{くどさん}九度山の北側をめぐって^{てしお}天塩川に注ぐ^{がわ}吉野川の中流にある2か所の滝です。約1300万年前に噴出した^{あんざんがんがんばん}九度山溶岩で出来た^{ちよくぼく}安山岩岩盤の段差にできた滝で落差は10m以内の直瀑です。下流にある比翼の滝は6mほどの幅で、1kmほど上流にある晨光の滝の幅は2mほどです。林道の雪が消える6月頃から10月頃までが見頃ですが、吉野川の清流と沢沿いの緑のトンネルをくぐる林道散策をあわせたコースを紹介します。

市街地大通から北に向かい、天塩川沿いの市道を進み、智恵文智東の踏切を越えてすぐに右に滝への案内標識から吉野川沿いの沢に入ります。左に広がるダンロップ(住友ゴム)の冬用タイヤのテストコースを過ぎ、3か所の橋をわたり両方の滝まで乗用車で行けます。林道散策の場合は、3か所目の砂防ダムのある橋の手前の広場に駐車し、ここから林道を上流に向かい



ます。すぐに林道の勾配がややきつくなり、谷側の川が崖状の沢の下に見えてきます。秋ですとこの辺りが紅葉の見所です。山側には野の花のヒトリシズカ、アザミ類、トリカブト類が点々と見られ、1.5kmほどで比翼の滝、そこから1kmで晨光の滝です。滝の下ではカワガラス、キセキレイ、キビタキが姿を見せてくれるかもしれません。

* 林道は狭く、特に上流では車が交差できる場所は限られるので運転に注意してください。比翼の滝に下りる道は急傾斜ですので足元にご注意ください。

所在地を
確認できます

比翼の滝



晨光の滝



フィールド編：
その5

九度山 (673.6m)

<山名由来は、アイヌ語の「頂上に岩崖のある山」>

^{くどさん}九度山は南斜面にピヤシリスキー場がある、^{なよろ}名寄のシンボルの山です。スキー場斜面を利用した登山道や麓の川沿いで四季を通じて自然に触れ合うことができます。

登山道はスキー場ゲレンデ西側の林間コースを利用してつけられ、約1時間弱で登れます。距離は2.5km、標高差は450mで前半は樹林の中を対面の沢にあるジャンプ台の高さと比べながら高度を上げます。第3リフト搭乗口で休憩してからは展望が開け、山の由来ともなった急傾斜を登り切ると登山終点のリフト降車場はすぐです。冬には頂上の岩崖をめぐるように林間コースもあり、ダケガンバに着いた樹氷が見事です。三角点のある頂上は、保護帯としてチシマザサとハイマツに覆われていますが、二方向が垂直の崖となり危険ですので立ち入らないでください。展望は登山終点でも十分に開けています。

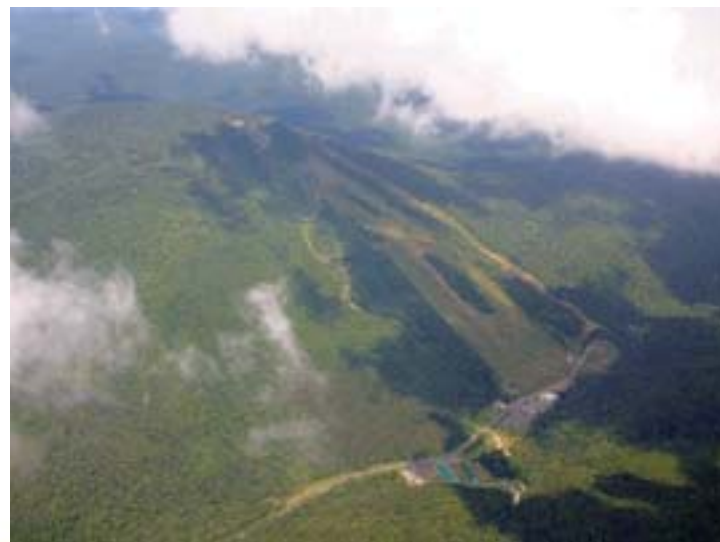
冬は条件がそろえば、サンピラー(太陽柱)がゲレンデ中腹で見ること

が可能です。リフト運行前の8時前後に見られるので、徒歩で頑張ってみてください。

登山はちょっとという方は、ピヤシリ川沿いに延びる観光道路周辺での散策がお勧めです。針広混交林と季節の野の花、キセキレイ、カワガラスなど水辺の野鳥にも出会えます。冬はスノーシュー、カンジキで夏には入り込めないところにも行けます。

登山も散策も、汗をかいた後は「なよろ温泉サンピラー」で入浴、食事ができ便利です。

* 登山コースの詳細は「夏山ガイド 6巻」(北海道新聞社)を参照ください。





フィールド編:
その6

ピヤシリ山

(西ピーク 986.6m、東ピーク 991m)

なよろ
名寄側の西ピークに1等三角点をもつピヤシリ山へは、2本の登山アプローチがあります。名寄からは西の麓のピヤシリスキー場を起点に山頂までたどるピヤシリ観光道路を乗用車でも行けます。6月のタケノコ狩りの時期には入山車両にご注意ください。ただし、頂上2km手前の峰越林道分岐にゲートがあり、ここからはダケカンパの中の林道を徒歩となります。頂上直下に避難小屋があり、ここからハイマツのトンネルをくぐると頂上で、キバナシャクナゲ、イソツツジ、エゾツツジ、コザクラなどの30種ほどの高山植物が見られます。北側にはピヤシリ大岩が鎮座します。冬の登山はスノーモービルのコースになる観光道路をたどるのが安全ですが、頂上まで4時間ほどをみてください。

下川町からの登山道は「サンルコース」とよばれ、令和に入りアプローチが変わっています。登山口までは道道しもかわ おうむ下川・雄武線のサンルダム湖近くから山越して御車沢をたどり、旧サンル鉱業所から1kmほどで林道崩壊のため車はここまです。



ここから登山ガイドにある登山口までは30分の徒歩です。標高860mにある小さな湿原からの急登の途中にあるヌカラネツ岩と東にみえるローソク岩が山名由来の「頂上に岩のある山」です。東ピークは西ピークに通じる登山道脇のハイマツの中にあります。東西ピーク間は平坦で、ハイマツ、ダケカンパ、エゾマツの雄大な景観が夏も冬も広がります。冬の樹氷をふかだきゅうや深田久弥が絶賛したのもうなづけます。春先には下川町が林道を除雪するゴールデンウイーク前に締まった雪の上を登山することが可能ですが、晴天の時がお勧めです。

* 登山コースの詳細は「夏山ガイド 6巻」(北海道新聞社)を参照ください。



アクティビティ編:
その1

装備

外歩きや色々な場所を訪ねるためには、それなりの備えと心構えが必要です。ここでは徒歩を前提に誰もが備えられるモノと心づもりを紹介します。

① デイバック

野外活動には少なからず装備類が必要です。安全に行動するためには、両手を常に自由しておく必要があります。そのために荷物は背負うことをお勧めします。最適なのは1日分の行動に必要な荷物が入るデイバックです。容量は20ℓ以内でジッパーなどで開閉でき、肩掛けベルトの幅広のものが良いでしょう。ただし、ティッシュペーパー、スマホ、財布などすぐに取り出したいものはウエストポーチや肩掛け小物入れと併用しても構いません。

② 共通の持ち物

季節や行動する時間により変わりますが、天候変化に対応もできる最低限のモノです。

- ・ **雨具**(防寒・防風も) ~ フード付きの上衣とズボンに分かれたものが最良です。少し価格が張りますが、湿気を外に逃がす素材使用のものを。折りたたみ傘もありますが、片手がふさがると風に弱い点があります。
- ・ **飲み物** ~ 500mlのペットボトルが手軽です。氷水や温かいものがほしい時は、保温ボトルが便利です。
- ・ **布類** ~ バンダナ、日本手拭い、タオル、風呂敷など、被る、包む、敷く、縛るなど多用途に使えます。大きめのサイズがあればベストです。

- ・ **袋類** ~ 各サイズのレジ袋、ビニール袋(チャック付き)、ごみ袋など。巾着用の袋であれば、小物を収納しバックの中が整理できます。
- ・ **ファーストエイド** ~ 常用薬、傷ばんそうこう、消毒液(布)、ウエットティッシュ、目薬、塗り薬(かゆみ、傷、スキンケア)など。緊急用なので少量・多種で各自工夫を。

③ 自然を楽しむ持ち物

季節、場所、目的により変動はありますが、小型で機能的なものを中心に。

- ・ **双眼鏡、ルーペ、多機能ナイフ、軍手、サングラス**
地図、図鑑、筆記用具、メモ帳
(これらはスマホの機能も活用可能です)
- ・ **夏の装備** ~ 熱中症予防の帽子類、不整地の道にはポール類。害虫対策は防虫ネット、各種虫よけ(塗り・スプレー)。
- ・ **冬の装備** ~ 雪上歩行のためには、足元は歩くスキー、スノーシュー、カンジキに両手にポールが必要です。





アクティビティ編: その2

足元と服装

夏と冬に分けて、半日程度の行動を前提に記します。

① 夏の服装

- ・ **足元**: 靴底がしっかりしたものが基本。運動靴、トレッキングシューズ(軽登山靴)、長靴で天候、行先に合わせて選びます。かかとが隠れるミドルカットの靴が基本です。足元は大切ですので、しっかりとしたものを勧めます。靴下も厚めのものを用意しましょう。
- ・ **衣類**: 北海道は夏季でも熱中症と低体温症の両方の対策を意識しましょう。下着は、体表に汗をためない吸汗速乾性の化繊のものが最適。シャツ、ズボンは耐久性と伸縮性のあるもの。外着は薄手のものを2枚用意するか薄いフリースを中間着として、体感温度に応じ重ね着(レイヤード)して調節します。



② 冬の服装

- ・ **足元**: 基本は夏靴と同じで、防寒、防滑のそれぞれ冬用を選んでください。
- ・ **衣類**: 下着は薄手でもヒートテックのような新素材も登場しています。上半身はフリース素材のものを中間着に厚手、薄手で調整してください。外着はダウンや同程度の機能の化繊素材か薄手のシェル素材もあります。いずれも中間着との重ね着で寒気に対応してください。顔と手は帽子、手袋、下半身はオーバーズボンの機能的なものを選んでください。



アクティビティ編: その3

心構え

① 危機管理(リスクマネジメント)

- ・ **危険な状況にならないための準備**となった時の対応に分かれますが、前者を中心に記します。野山に出かけるときには、事前に頭の中で想定(シミュレーション)を行い、天候、事故、怪我、体調不良などに対応する心づもりと準備が不可欠です。これが欠落していると、パニックや無駄な行動に陥り事態を悪化させます。
- ・ **道迷い**: 出かける前に家族に目的地、帰宅時間の伝達は必須です。事前の地理の把握、複数で行動、スマホのGPS機能でこまめに現在地確認を励行しましょう。迷ったと感じた時点で、冷静になることが第一です。道がついていれば来た道を引き返し記憶を逆回転させ、出発点に近づけば事態が好転する場合があります。
- ・ 山菜採集などでは、目標となる目印と行動の範囲と時間を決め、一回ずつ戻るようにしてください。

- ・ **危険動物・昆虫**: 動物では熊が考えられます。事前の出発情報と足跡、糞、踏み分けなどの痕跡を見極め、引き返す判断をしてください。行動中は鈴、笛などで人間の存在を知らせることも忘れず。

吸血昆虫の力、ブヨ、アブなどは不快ですが、ダニの方が感染症を含めて対策が必要です。藪の中に入るときは、フード付きの頭からかぶるタイプの外着(ヤッケなど)が有効です。帰宅後は着衣を脱ぎ体の

チェックを勧めます。スズメバチも体質によりアレルギーショックを起こしますので、体を低くして退避してください。接触をかぶれるウルシ類、トゲのあるタラノキ、ハリギリの幼木は素手で触れるのは注意です。

- ・ **危機対応**: 自分たちでは対応できない危機に陥ってしまった場合、状況は多様ですが、まずは落ち着くことです。連絡がつく場合は一番身近な方に連絡し、アドバイスをもらいます。次にけが人がいるなどの緊急度により消防などへの連絡です。圏外などで連絡がつかない場合は、動けるようであれば連絡がつく場所にたどり着くことを考えてください。

**野山に行くのは仲間と!
危険と天候の予知を!
装備は経験をもとに進化を!**

② フィールドマナー

「やさしいきもち」 車駐車への配慮、農業者への配慮、動植物への配慮、規制の順守

- ・ **や** ~ 野外では無理なく楽しく
- ・ **さ** ~ 採集は控えて、あったままに
- ・ **し** ~ じーっと静かに、時には動かさず
- ・ **い** ~ 一本道からは外れずに
- ・ **き** ~ 着るものにも一工夫を
- ・ **も** ~ 持って帰るのは思い出とゴミ
- ・ **ち** ~ 近づかないで、危ないところ



施設編:その1

名寄市北国博物館

名寄市字緑丘222番地 01654-3-2575

開館日:毎週火曜日～日曜日 休館日:毎週月曜日、年末年始

きたくにはくぶつかん なよろ
北国博物館は、名寄市の施設で歴史系の博物館です。常設展示室、特別展示コーナー、地域情報室、講堂、収蔵庫などがあります。常設展示室は多雪寒冷な北国の自然や歴史をテーマに、北国名寄、北の先史、カムイの森、さむさ・ひと・くらし、郷土コーナー、映像展示ごとに、ジオラマ、模型、実物資料が展示されています。特別展示コーナーでは年間を通じて歴史、自然のテーマごとに特別展、企画展が開催されます。

土日を中心に市民が参加できる自然観察会、歴史探訪会のほか講習会、講座、講演会も実施されています。地域情報室では調べ

物や問い合わせにも応じています。

野外にはSLキマロキ排雪列車が旧名寄本線上に設置され、遊歩道の散策もできます。冬季にはバードテーブルに訪れる野鳥や貸出用のスノーシューで雪上散歩が楽しめます。

* 料金、展示解説、各種事業は問い合わせください。

所在地を
確認できます



施設編:その2

なよろ市立天文台 きたすばる

名寄市字日進157-1 道立サンピラー公園内 01654-2-3956

開館日:毎週火曜日～日曜日 休館日:毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始

「きたすばる」は名寄市の施設で、プラネタリウムを併設した天文台です。展示コーナー、レクチャールーム、屋上観測室を備えるほか、北海道大学が教育研究用に設置した「ピリカ望遠鏡」が設置されています。これは公開天文台としては日本で2番目の1.6m口径をもつ大型反射望遠鏡です。

日に2回のプラネタリウム投影のほか、各種望遠鏡を用いた観望会をはじめ、移動観望会、学校授業、研究観測、講演会、音楽ライブ、インターネット配信も行っています。ピリカ望遠鏡は研究観測のほか、一般公開もされています。

天文台は道立サンピラー公園内にあり、隣接して「森の休暇村(オートキャンプ場)」のほか園路で結ばれた各種施設もあり、子供連れでも楽しむことができます。

* 料金、プラネタリウムの時間・内容、各種事業は問い合わせください。

詳しくは
公式サイトへ





施設編:その3

国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所
薬用植物資源研究センター北海道研究部
標本園・アイヌ有用植物園
 名寄市字大橋108 01654-2-3605

「薬用植物資源研究センター北海道研究部」は、昭和39年に寒冷地に適した薬用植物の栽培試験研究を担うため、国立衛生研究所北海道薬用植物栽培試験場として開設されました。研究施設、温室と試験圃場が大部分を占めます。ここでは、ダイオウ、ゲンチアナ、カンゾウ、センキュウ、シャクヤク、ハトムギ、エゾウコギなどの薬用植物を中心に優良品種の育成を行っております。

標本園は敷地の一角にあり、200種ほどの薬木、薬草が植栽されています。そのほかアイヌ民族が生活の中で利用した130種ほどの植物が名称、薬効などと共に名札が

付けられ整備されています。

* 開園:6月下旬~9月下旬
 (土、日、祝を除く平日)
 の9:00~16:30(入園は
 16:00まで)

入園の際は、必ず事務室にお申し出ください。
 そのほか、特別公開として6月下旬に「薬草・花まつり」が開催されます。

詳しくは
 公式サイトへ



<アクセス>



自動車

旭川~名寄(約77km) 約1時間30分
 札幌~名寄(約206km) 約3時間(高速利用)



JR北海道

旭川~名寄 約1時間(特急利用)
 札幌~名寄 約2時間30分(特急利用)



バス

旭川~名寄 約2時間15分
 (急行バス)
 札幌~名寄 約3時間40分
 (特急利用)



飛行機

東京~旭川 約1時間40分
 名古屋~旭川 約2時間
 東京~新千歳 約1時間30分



なよろ観光ボランティアの会とは

本会は、奉仕の精神をもって名寄市に訪れる旅行者及び市民に対するホスピタリティ精神の醸成、市内外のボランティア活動諸団体との連携・協調を推進し、観光ホスピタリティ活動の発展・活性化を目的として活動する団体です。



なよろ観光ボランティアの会ロゴ、愛称はイコロ

愛称：イコロ

イコロとは、アイヌ語で

『たからもの』という意味

名寄市の自然・歴史文化などすべては名寄市の

『たからもの』名寄市に訪れた方や市民の皆様

などもっとたくさんの方に知っていただきたい…。

そんな意味を込めてなよろ観光ボランティアの会で

2021年に愛称とロゴを作成しました。



< 凡 例 >

1. 本紙は、名寄市を訪れる方、及び名寄市民が郷土の魅力を再認識するガイドブックの目的で作成した。
2. 本紙の記述の主な参考文献は次の通りで、詳しく知りたい方は参照願いたい。
 - (1)「名寄の文化財・史跡」(北国ブックレット) 名寄市北国博物館 2016
 - (2)「風連町史 第2巻」風連町 1999
 - (3)「新名寄市史」第1巻(1999) 第2巻(2000) 第3巻(2002) 名寄市
3. 掲載写真の多くは名寄市北国博物館はじめ名寄市役所、名寄新聞社、NPO法人なよろ観光まちづくり協会より提供いただいた。ご協力を感謝申し上げます。

フラ・なよろ (名寄観光ガイドブック)

発行年月 / 2021年(令和3)7月

執筆・編集 / なよろ観光ボランティアの会

発行所 / NPO法人 なよろ観光まちづくり協会

〒096-0001 名寄市11条南7丁目1-1「よろーな」1F
TEL 01654-9-6711 FAX 9-6712

デザイン / 株式会社北都新聞社

〒098-0502 名寄市風連町北栄町146-1
TEL 01655-3-3111 FAX 3-4031

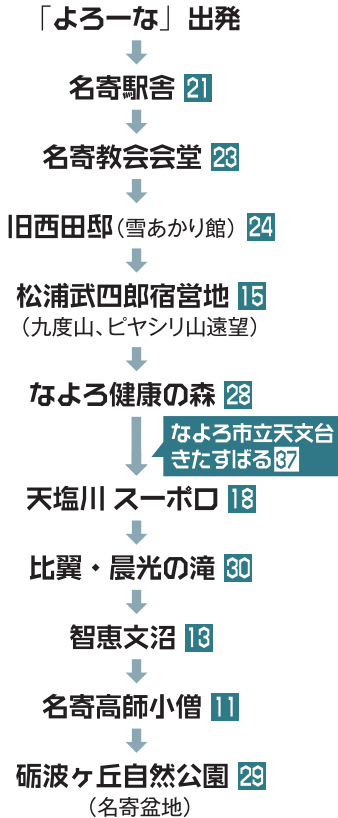


「ふる・なよろ」コース案内

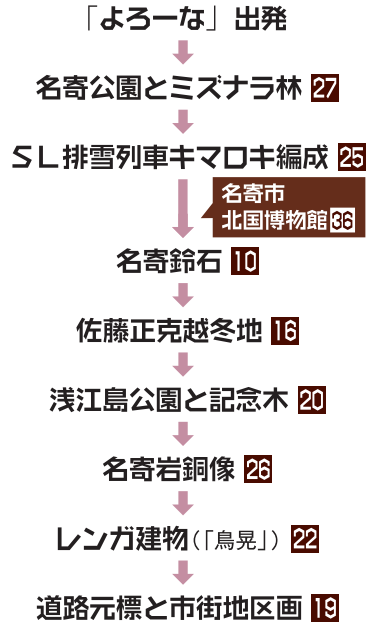
(乗用車使用)

■内の数字はハンドブックのページに対応しています。

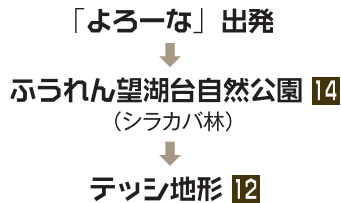
1. 北まわり (1日行程)



2. 南まわり (1日行程)



3. 風連まわり (半日行程)



- * 吹き出しのスポットを回るには所要時間が必要です。
- * 見学、立ち入る場合は、土地所有者・管理者のルールに従ってください。
- * 乗用車の駐車場所、ゴミなどの持ち帰りなどに配慮してください。